

## 専門セミナー参加記

(財) 渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター  
松崎 裕子

爽やかな秋晴れに恵まれた2006年10月18、19日の両日、東京目白の学習院大学で第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育会議 (APCAE) 「電子時代におけるアーカイブズ学研究とアーカイブズ学教育」専門セミナーが、国際文書館評議会・専門職教育研修部会 (ICA/SAE) の正式プログラムとして開催された。14カ国から80余名のアーカイブズ学・記録管理学の専門家が参加した。3本の基調報告と18本の一般報告、質疑応答と総合討論に加えて、休憩時間や懇親会でも各国の参加者と意見交換をする機会を得た。その中で特に印象に残った点を記したい。

まず第1に国や地域によって、また同じ国や地域であっても時代によって、アーカイブズ学の研究と教育が多様性に富んだものであることが示されたと思う。90年代末以降アーカイブズ関連の法制・組織が急ピッチで整備されつつある反面、アーカイブズ学の研究・教育が必ずしもそれに追いついていない状況である台湾や韓国の事例や、一種の「南南協力」として、広く発展途上国のアーキビスト・記録管理者を対象に「記録管理と保存修復および製本」の研修コースが運営されているマレーシアの事例が印象的であった。また、専門職であるレコード・キーパーへの就業機会は plenty (豊富) であるにもかかわらず、より専門的な教育・研究のために大学院で学ぶ人材が少なく、それが教育と研究の深化を阻み、大学・大学院におけるアーカイブズ学の専門科目としての確立を妨げている、というオーストラリアの状況を懇親会場で説明していただいたりもした。参加者が置かれている社会

的文脈の違い・多様性をも実感した。

第2に、アーカイブズ学教育における多様性を理論的にはどのように把握すべきなのか、という点でいくつか示唆に富む発表に接することができた。Luciana Duranti氏の基調報告(「アーカイブズ学教育のモデル—1つの統合されたモデルか、2つか、それとも無数か?」)は、アーカイブズを取り巻く環境や、抱える課題が多様であるにもかかわらず、アーカイブズ学の教育には必須の方法論的な核があると主張する。アーカイブズ学教育を電子時代という限定された対象に専門化・特化させるのではなく、基本を教えた上で、個々の課題を解決していくための方法自体を身につけさせるような全体的な (holistic) モデルを提唱するものであった。他方、Anne Gilliland氏と共同研究者による報告「アーカイブズ・パラダイムの多元化—環太平洋コミュニティにおけるアーカイブズ学教育の必要度調査—」は、多文化主義の立場からグローバル化と多文化化が急速に進む現代社会において、特定のアーカイブズ学教育モデルを規範として定立することに対し危惧を表明するものでもあった。

第3に、アーキビストの専門職資格認定制度に関するガイドライン作成をはじめとする国際協力に関わる議論をあげておきたい。専門職資格認定制度が未確立な地域に対する一種の国際協力として、ICA/SAEがガイドラインを作成してはどうか、という提案があった。前述の多文化主義あるいは文化的感受性の観点から、この提言に対して消極的な反応もあったように思われる。他にインターネットを利用した情報発信によって、既存のアーカイブズ学教育コースのコンテンツを共有できるのではないかという提案もあった。これらは今後さらに議論されるべきテーマであろう。

第4に、日本から4名の方々方が報告を行ったことで、この会議が日本でのアーカイブズ学研究ならびに教育の現状を海外に発信するよい機会になったと思う。ひとつ残念であったのは、同時通訳付きの会議であったにもか

かわらず、質疑応答や総合討論で日本からの一般の参加者の発言が少なかったことである。

最後に、このような国際会議を日本で開催していただいたことに対し、すべての関係者の方々、とりわけ事務局のご苦勞に心からお礼を申し上げて結びとさせていただきます。